

スウェーデンの教育的スロイドはいかなる考えを生み出してきたのか？

オットー・サロモン著
横山悦生訳

約 20 年前間、われわれはここスウェーデンで、学校のカリキュラムの中に教科としてスロイド—教育的な目的のために行われる肉体労働である—を導入させるために活動をしてきた。大きく見れば、少なくともこの努力が最も大胆な予想を乗り越えた結果を出したことについて、学校のカリキュラムに導入したという結果を自分のものにした人々は、この見解におそらく同意できるだろう。内務省 (civildepartment) への 1874 年の書簡で、県知事エリック・スパレ公爵が特に注目すべきこととして、「県の 7 つの教区、並びにヴェーネシュボリ市とオーモール市で民衆学校と連携した、ハンドスロイドを教えるスロイド学校が設置された」と伝えている。スロイド教育の活発な促進者であったスパレ自身もまたスパレと協力した人々も、わずか 15 年後にスロイドが教科として 1500 以上のスウェーデンの教育施設に導入され、この基礎にある考え方がとても多様な人生観やそこから出てくる多様な意見をもった指導的なグループの中で承認を得たことをほとんど予想できなかったであろう。また、他の教育問題でほとんど見られなかったのに比べ、スロイド教育の問題は比較的短い時間で様々な社会的グループの支持を獲得してきた。

しかし、最近の数十年間にスウェーデンのスロイド教育が著しい進歩を成し遂げたのは、地方における拡大についてだけではない。これと平行して、学校で教えるスロイド教育をできるだけ意味のあるものにする絶えざる努力が続けられてきたことがもっとも重要であると私は思う。すなわち、一方でスロイド教育がたてなければならない目的を明らかにすること、獲得された経験をもとにこれらの目的が最も容易にかつ確実に到達される手段を見いだすことがもっとも重要である。この不断に続く活動において多くの関係者が協力した。スウェーデンでもノルウェーでもフィンランドでも、スロイドは最初から民衆学校の問題であった。民衆学校の教師が最初からスウェーデンのスロイド教育を担い、今日あるようなものにしたことが公正に認められなければならない。民衆学校の教師たちは理想によって暖められ、その理想の正しさがますますはっきりしてきた。彼らはしばしばかなり大きな犠牲をとめないながら、この教育をおこなう能力を獲得しようとした。彼らは、スロイドが学校で導入される際に多くのところでかなりの抵抗を克服しなければならなかった。後に方法の改善の基礎となった観察と試行を繰り返し、また彼らはいろいろなところで教育的スロイドは疑いなく役に立つことについて承認を得るための情熱的な代弁者であった。それはスウェーデンの民衆学校の歴史の輝かしい一ページであった。すなわち「献身と義務に忠実な活動がなにを実際にもたらしたか」を未来の世代に証言する一ページをわれわれの時代の教師が書いた。

しかし国からの道徳的、財政的サポートがなかったならば、どんな熱心な教師でもほとんど何もできなかったであろう。それゆえ、スウェーデンの民衆学校のスロイド教育が、その進歩をかなりの程度、それぞれの学校を管轄する地域の役所のスロイド教育の関心に依存しており：わが国のスロイド教育の発展を教育現場で見ることをできた者にとり、少なくとも大きく見て、スロイドを学校の実習教科にすることについて、学校委員会の議長が非常に貢献し、彼らの啓蒙と熱心な援助なしに、私たちが現在の結果に絶対に到達できなかったことは全く明白である。民衆学校視学官の側からさえも、スロイドが特別に好意的に受け入れられてきた。当初はこの新しい教科に対して躊躇する立場をとっていた複数の視学官がこの教科の熱心な擁護者になった。政府の当該の官庁が民衆学校のスロイド教育に与えた直接的な財政的サポートに加えて、国はまたその熱心なインストラクターを通して、スロイド教育のさらなる普及に力強く働きかけ、ほとんどすべての県で地方議会と農業経済会議が予算を計上することを通して、その目的のために組織されたコースに教師を参加させる機会を提供することにより、その教育の計画的な遂行に配慮することを通して、学校スロイドを実現することに貢献した。教育者、医師、テクニシャン、その他の人々が、詳細にわたる価値ある情報や助言を通してスロイド教育に多大な貢献をし、同時に他の様々な人たちが熱い関心によって動かされ、スロイド教育に金銭的な援助をした。そのようにしてスウェーデンのスロイド教育は多くの人に好意的に理解され、サポートされてきた。さらに国内の成長中の世代に役立っただけでなく、外国にもスウェーデンの学校がよく知られ、高い評価を受けるようになった。

外国の学校関係者の注目が最初にスウェーデンの学校スロイドに向けられたのは、約 10 年前であった。デンマークの著名なフースフリート (husflit) の推進者であり、騎兵大尉であるクラウセン・カース (Clausen

Kaas)が書いたものを読んで、1880年11月にプロイセンの教育大臣がスロイド教育の学校への導入のために取られた措置についていろいろな場所で調査するために8人からなる使節団をデンマークとスウェーデンに派遣した。この使節団には、シュナイダー (Schneider) とルーデルス (Lüders) 両博士の指導の下に、のちにドイツのスロイド教育の主導者になるシェンケンドルフ (Schenckendorff) とブランディ (Brandi) がいた。1880年12月15日にシュナイダー博士がプロイセン代議院においてこの視察旅行での観察を報告をした。彼がその際に強調したことは、デンマークでみてきたことに使節団は満足できず、それに対してスウェーデンのスロイド教育がとてもよい印象を与えたことであった。彼は言う。「教育としてネースで行われていることは、実際には形式陶冶の側面をもつことをわれわれは認めなければならない。材料が綺麗に加工され、課せられた課題が与えられた見本にしたがって完成されるまでは、材料から子どもが離れないように指導されるならば、さらに作業の際に子どもの精神力と体力の範囲を超えないならば、このような取り組みによって教育的作用が期待できるであろう。」スウェーデンへの使節団訪問の最も重要な結果は、多くのドイツの教師がネースでの講習会を受け、いくつかの地域、特にオスナブリュック (Osnabrück) ではブランディによって、ポーセン (Posen) では教師ゲルティヒ (W. Gärtig) によって、スウェーデンをモデルにしたスロイド学校が設置された。これらの学校は常に前進し、現在でもドイツで重要な学校である。最近の十年間にスウェーデンは、それ以来同じまたはよく似た目的のために多くの外国の学校関係者によって、一部は各国政府によって、一部は個人のイニシアチブによって訪問を受けた。この代表者の出身国を記すなら、ノルウェー、デンマーク、フィンランド、ドイツ、フランス、ベルギー、オーストリア、オランダ、スイス、ロシア、イタリア、イングランド、スコットランド、アイルランド、アメリカ合衆国、アルゼンチン、チリ、ウルグアイ、日本である。よく知られているように、この観察をもとになされた発言は、スウェーデンの学校スロイドがこれまでに到達した比較的高い立場を証言している。彼らはスロイド教育の点でどのようなアイデアがスウェーデンで生まれたのか、どのような基本テーゼがスウェーデンでつくられた教育的なスロイド教育の背後にあるのかを常に重視した。それに加えて当然豊かな資料があり、いろいろな国でおこったスロイド教育の発展の説明を通して、スウェーデンで生まれ、そこから持ち帰られた、これらのアイデアがどれだけ用いられたかを示すには、この論文で引用する紙面も余裕もない。しかし、これらのかなり興味ある問題、スウェーデンの側からあまりにも長く無視されてはならない問題について、より徹底的な説明を別の形で公表する機会を得ることを希望している。すなわち、問題は以下のことである。彼らは教育的なスロイド教育の点で、スウェーデンにおいて何が最初に提起され、適用され、つくられたかを忘れがちであるように思われる。しかし彼らはスウェーデンにおいて見出された基本テーゼを学び、時の経過とともに得た経験を得てそれらを自分自身のものとみなし、スウェーデンとのかかわりには触れずに独自のシステムであると主張することさえある。この点について彼らがどこまで言及しているかという状況については、別の機会に譲りたい。スウェーデンから学んだモデルシリーズに多かれ少なかれ重要な変更を加え、そこに含まれている練習の順番を変える、一つのモデルを別のモデルに置き換える、方法的な手続きを修正する等を通して、すぐに新しいシステムを完成させる。その際、彼らはしばしば教育的システムとその適用との違いをまったく見失う。システムそれ自体は当然単なるテーゼの総体であり、理論的に確立したものであるが、その実践的な適用については表面的にはまったく異なった表現があらわれる。二人の教師が授業で同じかまたほとんど同じの基本テーゼに従ったとしても、ある教師がもう一人の教師と同じように唯一のモデルや唯一の道具を使う必然性はない。同じ理論的なテーゼのために多種多様な別の表現をとることができるからである。例をあげるならば、仮にある人が高く黒い帽子を被っているに対して、他の人は低い灰色の帽子を被る。両者がたまたま異なるやり方で帽子をかぶるという共通の基本テーゼに従っている。

現在の時代のスロイド学校が最初に設置された当時には、スロイド学校の教育が本来目指すべきものが何かを理解するにはほど遠かった。大部分がもっぱらあるいは少なくとも理論的であるような活動は、成長中の世代のためにならないという、あいまいな感覚があった。また、実践的な活動が練習される学校を望むという感覚があった。しかし、確立されたその目的は教育的というより国民経済的な性格のものであった。フースロイドやヘムスロイドの高揚、手工業者のより適切な徒弟の採用がスロイド教育の促進のための明白な理由であると一般的に見なされた。若者の教育の一つの手段としてスロイド教育の意義については当時はぼんやりと予感されただけであった。スロイド学校と民衆学校で行われるべきスロイド教育との間に最初に明確な線を引いたのは、有名なフィンランドの教育者ウノ・シグネウスであった。彼はスロイド学校にある種の応用学校、あるいは職業学校を見た。彼にとって民衆学校は普通教育のための教育施設であり、さらに

唯一の共通の基礎学校であった。そこで教えられるスロイド教育は、専門的な教育のいかなる色合いからも解放されていなければならない。もっぱら基礎的なものでなくてはならない。「スロイドは民衆学校において一つの形式的な教育手段である」というテーゼは、シグネウスが確立したテーゼの一つであり、彼はそれを自分の監督のもとで発展したフィンランドの民衆学校においてこのテーゼを適用しようと試みた。スウェーデンの教育的なスロイド教育はこのテーゼを同じように自分のものにした。スウェーデンにおいては、フィンランドにおいてすら模倣された方法によって、その結果を引き出した。

スロイド(slojdande)は基礎的な教育施設においてスロイド自体が目的でなく、その目的は子どもの精神的及び肉体的な面における発達に一つの手段として役立つことである。完成した作品でなく、作業の中で生徒が獲得する発達そのものがスロイド教育(slojdundervisning)の第一の目的である。「スロイド(slojd)は学校のためにあるのであって、学校がスロイドのためにあるのではない」ことが、実現されなくてはならない。このテーゼは次第にスロイドが行われているほとんどすべての国で教育的なスロイド教育の出発点となってきた。すでに現在、十分な経験を得て以下のことが明らかになっている。このみかけは回り道であってもそれ自体が近道であること、もし若者たちが学校においてすでに肉体労働に対する尊敬を学んでいるならば、また学校において方法的に順序立てたやり方で自分の手で作業することを学ぶことができているならば、そのことはヘムスロイドや徒弟制度にも役に立つ。学校スロイドは確かにヘムスロイドにはならないが、間接的にそれへの準備である。つまり、「普通教育の手段としてのスロイド」という基礎的な原理それ自体は、第二の原理としてスウェーデンの教育的なスロイド教育によって初めて実現された。それ以外にもいくつかの重要な点がある。スウェーデンのスロイドはアイデアを明白に与え、また少なくとも最初に実践的な応用を試みたことである。他の一つは、授業では一つのスロイドまたは少数の種類のスロイドに集中することである。すなわち、教師たちは、生徒が一つの種類の作業から他の種類の作業に絶えず移るならば、例えばかごを編んで、次にまな板を削るといような授業になるならば、授業の結果がかなり問題になるという理解に次第に達した。あれもこれもしたのでは、本物の技能には決して到達できない。生徒は常に教師の直接の援助に頼る。自立せず、ごまかすようになる。生徒に自分自身がよくなされた仕事の主体であると自覚することで得られる満足感に達することはない。この目的のために最適のスロイドの種類である、木工スロイドに限定することによって、十分に系統的なやり方で行うことによって、学校においてスロイドをすることが単に気分転換のためになされる作業とは違ったものになることへと導くことに次第に成功してきた。これを通して子どもたちは比較的永続的な価値であるところの、何かを自分の手で遂行することができる能力を持っていることを理解する。子どもたちが学んできたのは働くことであり、働くことを生活のための知識としてみなすべきである。子どもたちは重点を多くのことを遂行することではなく、すべてのことをできるだけ上手に注意深く遂行することにおく人だけが役に立つ労働者になれることを理解し、小さく見えることまで注意深く丁寧に遂行することを通して本物の人物に最終的になることができることを学んだ。

私は系統的な方法について述べた。スウェーデンにおいて見出されたアイデアである、やさしい練習から難しい練習へ、単純な練習からより複雑な練習へと木工スロイドの授業を系統的に組織するというアイデアはある意味で画期的なものになった。というのは、それ以外の方法では実際に意味において教育的なスロイド教育は不可能であるからである。いわゆる実践的学校スロイドがたまたま生徒の目の前にあることに取り組みませ、生徒がやりたいことに取り組みませ、受けた注文に取り組みませたりするが、手工業の制作方法にしたがって、初心者にせいぜい抽象的な準備練習で道具の使い方を学ばせるくらいである。それに対して、スウェーデンの教育的スロイドは、一つ一つの制作物が有用で使えるものが系統的に配置されている標準化されたモデルシリーズを導入してきた。スロイドの種類によって異なる作業に含まれる練習をこの目的のために分析してきた。また、実験的な方法で、それらの相対的な難しさの程度を調査し、それぞれの段階で適切な方法によって組み合わされた練習を含むものを見出そうと試みてきた。

長い年月にわたるこの作業において、観察者がイメージするものよりももっと困難で複雑な作業において、何百ものスウェーデンの教師たちが互いに協力してきた。スロイドの教育的で系統的な順序というアイデアそのものが与えられて以降、経験が蓄積されて、ますます詳細な部分が完成していった。疑いもなくこの点においてまだなされていないことや明らかになっていないことがたくさんある。しかし、一度踏み固めた道を最後まで行く力は十分にある。

「子どもにあまりに多くのことを望んではいけない」という一つのテーゼは、スロイドの作品が下手に作られたことを隠したい場合によく引用される。このテーゼはもちろんそれ自体では正しいが、子どもの作品

に要求できるのは最低限だけであるというように理解されてはならない。多くなされた観察は逆のことを示している。もし教師が実際に系統的なやり方でを行い、生徒の関心も十分に使おうとすれば、熟練した教師は「あまりにも多くのこと」を要求せず、比較的にとても正しい作業を容易に生徒に遂行させるように導く。スウェーデンの教育的なスロイド教育は、この疑いもなく重要な点、つまり教師が学校においてレベルの低い中途半端な作品に満足し、それゆえ教師がこの段階でそれ以上を要求することができないならば、教師が有能で几帳面な労働者でなく、ごまかす人間を育てる危険性が身近にある点を明らかにすることに少なからず貢献してきた。スロイド教育の学校への導入に反対する理由の中で最も重い理由は、将来の手工業者がそのような教育を通して働くことを学ぶだろうが、下手に働くことを学んでしまう、という危惧である。下手に作られた作品を提出することが許されるならば、無条件に生ずる怠惰の習慣を後に取り除くことは困難である。その習慣は思ったよりも早く一生続くものになる。それゆえ、スウェーデンの学校で見出されたされたものは疑問の余地ない価値を示している。もし、そのための正しい措置さえとられれば、初心者ですら実際に完全に使用に耐えるような正確な作業を遂行することができる。製図教育がスロイドにおいて使われる設計を利用することと、一定の寸法にしたがって作業することは、スウェーデンで採用されたやり方である。そのやり方はスロイド教育が生活のために役立つことを目的にする限り、学校で遂行された製品の価値を高め、それによってスロイド教育それ自体の価値を高めることにより貢献してきた。

スロイドは形式的な教育手段である。すなわち力を発達させるための手段であり、その力のなかに精神と身体の両方の力の発達を含む。この身体の前では、スウェーデンのスロイド教育はスウェーデン体操とともに、現在他の国々においても模倣されているアイデアを生み出してきた。肉体労働は健康に役立つというフレーズは修正され、あらゆる種類の肉体労働ではなく、衛生的に好ましい環境の下でなされた肉体労働だけに役に立つとされた。これらのアイデアの中でも、作業に対する要望は、一つは身体の高い動きを認められず、座ったままの状態を強制されないこと、もう一つは身体の高い発達に役立つ姿勢に気をつけることが特に強調されてきた。両側の筋肉を使うように交代させるように努力する。同時に、スロイドは自由な活動の性格を保持するとともに、この観点から見て、ある種の応用体育として現れる。確かに教育的な体育に代わることはないが、同じ目的に向けて作用する。スウェーデンで確立されたこれらの基本テーゼは、デンマークにおいても同様にある程度注目されてきた。

多くのことを付け加えるべきであるが、残された紙面はほとんどない。私たちはスロイドの教師に対して、ある程度の技能をもつこと以上に、他のより重要な要求を立てるべきである。すなわち、教師が子どもとつきあうことができること、教師がスロイド教育の教育的な意義とスロイド教育が十分に本領を発揮することができる手段を知っていなければならないこと、これらはフィンランドにおいてシグネウスによって確立された思想であり、ここスウェーデンにおいてさらに発展させられた思想である。若い世代のために適切な方法で、スロイドが提供する大きな教育的可能性を利用するために、教師が自分自身を教育するための必要な前提を教師に与えることを目的としたコースの組織、スロイドと手工業との違いの強調、スロイド教育を体系的なものにすること—これらことや他のことは、スウェーデンの教師たちが統一した活動を出発点として、将来いつか、教育学の歴史が評価すべきアイデアである。

(1890)